

景観資源を活かした農山村地域の再生 ～足助香嵐渓地区のまちづくり～

豊田市 都市整備課
甲村 尚義

1 はじめに

豊田市は、愛知県のほぼ中央に位置し、平成 17 年の 7 市町村合併により、県下最大の市域(約 918 km²)と県下2番目の人口(約 42 万人)を有する中部圏における中核市である。

また、本市は、製造業を中心とした“ものづくりのまち”で、我が国屈指の産業都市でありながら、合併により、森林面積が市域の約 70%を占める豊かな自然に恵まれた農山村の一面も持ち合わせている。

こうした多くの資源を大切にするとともに、都市部と農山村部、それぞれの地域特性を活かしながら、そこに住む人たちが夢や希望を持てるようなまちづくりを目指している。

2 本市が目指す、「地域自治システム」と「おいでん・さんそんシステム」

日本全体が、人口減少・超高齢化が進むという社会背景のなか、本市においても、都市部と農山村部における地域特有の課題を抱えており、これらの問題を解決する本市独自のモデルとして、地域単位の“自立”を目指す「地域自治システム」と地域相互の“つながり”を目指す「おいでん・さんそんシステム」(図1)を構築している。

この「地域自治システム」は、地域会議(委員は住民から選出され、中学校区単位で設置)が主体となり、地域自ら考え、自ら動いて地域課題を解決するシステムである。

また、「おいでん・さんそんシステム」は、都市部と農山村部を様々な主体が“つながる”ことで、問題解決を実践するシステムである。

この2つのシステムの「自立」と「つながり」により、本市の弱みを強みに転換し、まちづくりを推進している。

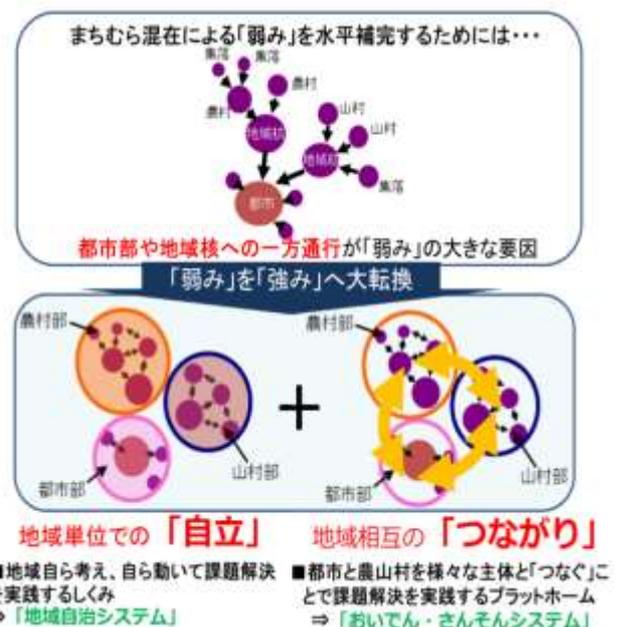


図1 「地域自治システム」と「おいでん・さんそんシステム」

3 足助地区におけるまちづくりの変遷

足助地区は、全国的に有名な紅葉の名所「香嵐渓」(写真1)と、“美しい日本の歴史的風土 100 選”に選ばれたまち並みを有する都市近郊型の農山村地区である。

しかし、隣接する景勝地「香嵐渓」の賑わいと反し、歴史的まち並みがある区域は、空き家や空き店舗が目立ち、街道沿いのまち並みは、かつて賑わいが薄れつつあった。

当地区は、かつて江戸時代に中馬(ちゅうま)街道「塩の道」と呼ばれた街道の宿場町として栄え、その後の交通の変遷とともに、明治から昭和初期に商業地として発展したまち並みや建築物が当時の趣のまま、数多く受け継がれている(写真2)。地域では、昭和50年に「足助の町並みを守る会」を設置し、住民によるまちづくり活動が始まり「第1回全国町並みゼミ、足助・有松大会」の開催地として、全国のまち並み保存運動の先駆けとなったことを契機に、平成6年には、「街なみ環境整備事業(補助制度)」の活用にあわせ、「街づくり要綱」や「街づくり規範」を制定し、まち並みの保存に取り組んできた。

その後、時代の変遷とともに生活様式が変化し、伝統的な家屋が壊され、新しい工法や材料で建てられた家屋や大きく派手な広告物が設置される等、先人たちが守り伝えてきた“足助らしい景観”が失われつつあった。

そこで、住民は、『私たちの財産であるこのまち並みを、次世代の子どもたちに引継いでいきたい』との強い思いから、住民、商工会、観光協会等を総括し、総合的な見地からまちづくりを行うため、住民自らが「足助まちづくり推進協議会」の発足以降、約2年間に及ぶ議論を経て、「景観まちづくりルール」を作成し、強い意志を持って、まち並みの保全・継承を行ってきた。

これを受け、行政では、当地区を豊田市景観重点地区に指定(平成22年3月)し、「山並み景観を守る」、「まち並みを活かす」、「足助らしさを育む」の3つの景観形成の方針とした「足助景観計画」を策定している。



写真1 紅葉の名所として知られる「香嵐渓」

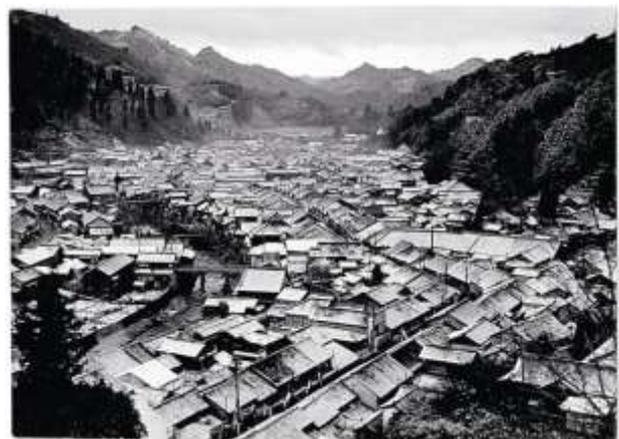


写真2 足助地区の昭和初期のまち並み

4 後世に残すべき景観を活かしたまちづくり

(1) 都市再生整備計画事業

当地区では、地域の自立を目指し「景観資源を活かしたまちづくり」を進めるため、都市再生整備計画事業(旧まちづくり交付金制度)を活用し、電線類地中化等の景観整備を実施している。

事業実施にあたり、市と市民の共働を基本方針として、「足助まちづくり推進協議会」を発足し、ワークショップ開催等による地域住民の意見を反映させたまちづくりを進めてきた(図2)。



図2 地元の組織体制

整備計画の策定においては、「自然と歴史を受け継ぎ、暮らしの香り漂う生活空間の創造」をテーマに、3つの具体目標(①歴史・文化・自然・景観を活かした、古くて新しいまちづくり、②安全・安心で快適な、生活感ある暮らしを感じるまちづくり、③観光・商業と連携した、活力ある共働まちづくり)を掲げるなか、足助まちづくり推進協議会が主体に議論を重ね、電線類地中化、道路及び橋梁の修景整備、サイン整備、既存建造物活用等の各事業に取り組んできた。

特に、電線類地中化整備後の道路修景整備においては、景観に配慮して、路側線等の白線・道路標識等の除去が行われており、これは住民同士が議論するなか、道路標識等があれば安全と決めつけて安心するよりも、交通安全についてまち全体で考え、対応することの方が大切だという結論によるものである。この取組を通じて、住民は、まちづくり、相反する「景観」と「安全」を高い次元で統合することの重要性に気づいている(写真3)。

整備効果としては、整備終了時の平成25年の住民アンケートによる町並みの満足度が整備前37.2%(平成18年度)に対し、51.5%となった。また、歴史的なまち並みの歩行者数は、整備前970人(平成19年度)に対し、2,147人と目標値1,358人を大きく上回る効果が表れた。

このように、都市再生整備計画事業は住民と共働で計画・実施してきたことで、住民の意見を取り入れた「足助らしさ」を反映させるまちづくりを行うことができた。また、今後のまちづくり活動においても住民自ら盛んに行われることが期待できる(写真4)。

(2)重要伝統的建造物群保存地区への選定

当地区は、まち並みを守るため、昭和52年当時、重要伝統的建造物群保存地区の選定に向けた活動を行ってきたが、当時は地区住民の合意が得られず断念している。主な原因としては、保存地区に選定されると、建替え等によるまち並み・景観の現状変更に関わるすべての行為に対し、許可申請が必須となるため、住民の理解が得られなかったものである。冒頭に述べたように、その後の時代の変化もあり、足助まちづくり



写真3 電柱と白い外側線がなくなったまち並み



写真4 住民が主体になった「サイン検討委員会」



写真5 足助の歴史を伝える建造物(旧紙屋鈴木家住宅)

推進協議会(平成17年)の結成を契機に、住民対象の座談会・ワークショップ・説明会等を何度も重ねていくことで、住民のまち並み保存に対する意識が高まってきた。その結果、住民との合意形成を得ることができ、平成23年7月に、国から重要伝統的建造物群保存地区に選定された(写真5)。また、この保存地区の選定を記念し、同年8月に学識者、住民、地元小中学生等が参加した記念シンポジウムを開催した。参加した中学生からは、“足助が古い伝統を残していることがすごいことだと気づいた”や“後世に残さなくてはならないまちである”等の積極的な意見が出され、次世代の育成に繋がる期待感が感じられた。このように、保存地区の選定が、住民一人一人が、まちづくりに対するより関心を持ってもらう、良いきっかけにもなったと考えている。

5 足助香嵐渓地区まちづくりの今後の展開

当地区の都市再生整備計画事業は、住民参加のもと、平成25年度末をもって、ハード事業とソフト事業が完了したが、更なる改善点として「空き家・空き店舗対策とその体制づくり」、「周年型観光へ向けた夏・冬季の魅力づくり(PR)」、「重伝建保全の具体化と活用」等が挙げられる。

また、今回の主要事業である電線類地中化を通じ、住民の景観に対する意識が高まり、地区内で地中化されてない場所の整備や、まち並みがすっきりしたからこそ見えてきた看板・広告物の改善等に対する意見が、早くも住民から出てきている。

本市としても、まちづくり推進協議会等、住民と行政が共働で、地区の様々な問題を議論し、地域の自立を目指したまちづくり活動を継続的に進めていくべきと考えている。

6 おわりに

本市の農山村部では、過疎化や超少子化・高齢化が加速しているが、都市と農山村が近接する豊富な地域資源や取組を“生かし”、“受け継ぎ”、“繋いでいく”ことこそが、本市が目指す将来の「持続するまち」となっていくものと考えている。本市で生まれるもの、生み出されるものを消費し、歴史・文化・芸術・スポーツ等を楽しむことを「WE LOVE とよた」の取組として、住民とともに進めており、この取組は、次の世代に自信と誇りを持って繋げていく「未来への投資」であり、今を生きる私たちの使命であると考えている。

当地区における景観整備は終了したが、引き続き、足助まちづくり推進協議会や地域住民、行政が「共働」して地区の様々な問題等を議論し、次のまちづくりに繋げていくことを期待したい。このようなまちづくりが発端となり、地域内で経済を回し、地域の自立と活性化を促進することは、これからの地方創生のロールモデルになり得ると考えている。



写真6 足助祭りでのにぎわい